

VART 2018

4月号 (発行回数、発行月ともに不定期)

長野県上田市でワイン葡萄を栽培しながら画家として活動している長谷川真次のフリーペーパー。

葡萄畠の様子や生育状況、油彩を中心としたアート作品、そして田舎暮らしや地元ネタなど、

写真、アート、エッセイなどを織り交ぜながら、ゆるゆると発信していきます。

※VARTは、フランス語でワイン=VinのイニシャルVと、芸術=Artを組み合わせた表現です。
※パート・ジャパンは、画家・長谷川真次がひとりで運営しているワインショップです。



今号の1枚。

桜と軽トラ(2018年4月6日撮影)

冬から春先にかけての畑作業でいちばん嬉しいのが「水が上がる」瞬間。土中の根周りに養分を溜めて冬をやりすごした樹々たちが、地温の上昇とともに全身にその養



ところが、2月中旬以降は一転して暖かい日が多くなり、3月に入つたとたん、ぐんぐん気温が上昇。最高気温が平年を上回ることなんと23日、うち20℃越えが8回もあり、これはこれで体調管理が難しい。全国的にも気候の変化が多かつたようで、「天候不順の予兆か?」

と、早くも不安な気持ちが芽生えてくる。農業も精神的にタフでなければ続けられません!



cave hatanoにて熟成中の2017メルロ

発売は6~8月頃の予定。それぞれどんな個性をまとったワインになるのか。期待値の上昇と共に緊張感も増しています。

イン品種が東御市の「cave hatano(カーヴ・ハタノ)」で、そして初ヴィンテージとなる白ワイン品種は下伊那郡松川町の「信州まし野ワイン」で静かに熟成中。この後どのタイミングで瓶詰めをするのか?は大きな課題です。「ワインの出来は原料葡萄が8割」とはよく言われますが、やはりしつかりした判断力を持つた醸造家あつてこそではないでしょうか。

Wine

今年も、不安と期待がないませ。
暖かくても心配。
2018年の栽培シーズンが始まっています。「今年はどんな年になるのかな?」と、年初は期待に胸を膨らませるもの、1月から2月上旬まで続いた強烈な寒さに耐えながら、体調をキープするのに精一杯の日々でした。

昨秋に収穫した葡萄は現在、赤ワイン品種が東御市の「cave hatano(カーヴ・ハタノ)」で、そして初ヴィンテージとなる白ワイン品種は下伊那郡松川町の「信州まし野ワイン」で静かに熟成中。この後どのタイミングで瓶詰めをするのか?は大きな課題です。「ワインの出来は原料葡萄が8割」とはよく言われますが、やはりしつかりした判断力を持つた醸造家あつてこそではないでしょうか。

今年も、不安と期待がないませ。
暖かくても心配。
2018年の栽培シーズンが始まっています。「今年はどんな年になるのかな?」と、年初は期待に胸を膨らませるもの、1月から2月上旬まで続いた強烈な寒さに耐えながら、体調をキープするのに精一杯の日々でした。

昨秋に収穫した葡萄は現在、赤ワイン品種が東御市の「cave hatano(カーヴ・ハタノ)」で、そして初ヴィンテージとなる白ワイン品種は下伊那郡松川町の「信州まし野ワイン」で静かに熟成中。この後どのタイミングで瓶詰めをするのか?は大きな課題です。「ワインの出来は原料葡萄が8割」とはよく言われますが、やはりしつかりした判断力を持つた醸造家あつてこそではないでしょうか。

今年も、不安と期待がないませ。
暖かくても心配。
2018年の栽培シーズンが始まっています。「今年はどんな年になるのかな?」と、年初は期待に胸を膨らませるもの、1月から2月上旬まで続いた強烈な寒さに耐えながら、体調をキープするのに精一杯の日々でした。

行き先は三叉路のようです。

作家活動も4年が過ぎ、【1】やりたい方向、【2】やるべき方向、【3】闘うべき方向と、ぼんやりながらも3つの道筋が見えてきている。

【1】は自分だけの世界。独自の表現を求めてひたすら描くこと。誰

の評価もいらない。共感もいらない。自身の心が動けばそれでいい。描いているときの気持ちよさが得られればいい。描く行為そのものが精神安定剤になる。ここが本懐。

【2】はその真逆。仕事として描く。つまり、求められる絵を描く。長く広告・販促のデザインをやつてきたおかげか、それとも芸術教育を受けていないせいか、「こうでなければいけない」というドグマに縛られることのが無い。グラフィックデザイナーは「顧客の要望を満たしながら、差別化できる独自の表現」ができるとプロとして生き残れないので、どうやら長い訓練のおかげで、意識せずとも切り替えができるのかもしれない。

【3】は1と2の両方を完遂すること。これはまあひとつの中立的理想であり、とてもなく困難な道。ごく一部の限られた人間にしか通ることが許されない道なのだろう。

ただ、芸術や表現の世界では「自由」の許容量は大きいと思っている。

つまり、『それ』を目指すのは勝手なのだ。誰になんと言われようと。2018年からは三叉路の真ん中でしつかり顔を上げていく。



求められる絵も魂込めて描きます。「晩秋の海野宿」／紙にペン&インク／2017年

予想外も予想以上も。色々ある田舎暮らし。

限界集落のエリートコース?

とう今年は「公民館分館長」という予想外の展開に。公民館の分館は、住民自らが運営するコミュニティ施設で「分館長」にはそれなりの責任があり、よもや移住5年目の自分がなるとは…。地元民からは「エリートコースだね」とからかわれます。嬉しくはないけれど、小さいながら600年以上に亘る嘗みの歴史があるこの限界集落が、

何らかの力タチで次の世代に受け継がれていくお手伝いができるなう、頑張り甲斐もあります。



4月1日、養老会のイベントもなんとかこなしました。

★クチーナ・デル・ポルコ★

千曲市の戸倉（とぐら）にあり、女性シェフがお母様と二人で切り盛りする小さくてカワイイお店。イタリアと豚肉をこよなく愛し、店名にまで豚野郎＝ポルコと付ける徹底ぶり。自慢は豚肉料理と手打ちパスタで、地元野菜とスイーツも魅力の「マンマの台所」です。



イケメンのシェフ目当て?女性客が多い。

2016年に独立。地元野菜をふんだんに使った料理は個性と滋味の競演がお見事。内装まで手作りしてしまうその感性と親しみやすい人柄のギャップにやられます。



店内のいたるところに豚愛が。